

---

# かけがえのないひと

GARAM

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

かけがえのないひと

### 【Nコード】

N1785C

### 【作者名】

GARAM

### 【あらすじ】

決して産まれてはならないとされている龍人族…産まれたら即死刑になる彼らの運命は…

## 第1話 龍王の秘密

『くそ！…なんで…？何故こんなことに…！？絶対に許さねえ…！  
必ず…』

さかのぼること500年前…

ここは人が入ることすら、いや、見ることすら叶わぬ禁断の地ヴィ  
ルノア

数多くのモノが住まうそのヴィルノアで圧倒的な軍事力、そして圧  
倒的な数を誇っていたのが龍族

そしてその龍族を統べるわ龍王…

他の龍達を寄せ付けぬその圧倒的パワー…その圧倒的パワーを使い彼はヴィルノアを恐怖で支配していた…

しかしそんな彼にも恐れるモノがあった…

個体数は極端に少ないがパワー知力寿命どれを取っても龍族の上を行く龍人族

龍人族の個体数が極端に少ないのは子を作れないからだ

龍人族がどうして産まれるかその理由は定かでは無いが龍人を産んでしまいかくまったとなればその龍族の命は無かった…

龍族、龍人族の寿命は限りなく永い現に龍王は100万年龍人王は120万年は軽く生きているハズだ

その上龍人族はその者がもつとも成長する歳で成長が止まる

龍族に姓別は無い

龍族は1000年に一度10体の子を産む

龍王も例外ではない

そしてその年は龍王の出産の年だった…

しかし、産まれてきた子は生まれてはならぬ

そう龍人だった…

流石の彼もこれには焦った

主が掟を破るわけには…

しかし…

『我が子を産まれてすぐ果てさせるのか？』

彼は悩んだ末にアカナの封印を一度解き放ち我が子達を追放する事にした

龍人族の里、

アカナに追放された10人

その子達を初めに拾ったのは龍人王護衛部隊部隊長

姓を頂<sup>コウ</sup>、あだ名を翁兼<sup>オウケン</sup>

と言つ貫禄溢れる者だつた

前にも話した通り2000年程前に産まれた龍人は追放から死刑に変わっていたので彼が驚くのも無理はない

彼は子供を見るなり担ぎ上げて龍人王の元へ馳せ参じた

『項 翁兼よ、ご苦労であつた』

『ははっ勿体ない程の有り難きお言葉』

『この子供は私が責任を持って預かる』

こうして10人の子達は龍人王の元で育つことになった

## 第2話 鬼族との仲

『おっお待ち下さい！龍泰様！』

この声の主は頂 翁兼である

声を掛けられているのは10人の子の中で、否、龍人族の中で1、2を争う武力、知力そして顔を持つ

姓を龍泰<sup>リュウタイ</sup>あだ名を鳳神<sup>ホウシン</sup>

と言う男性だった

見た目は18才程度の銀色のショートヘアの美少年でこの物語の主人公である

『待ってと言われて待つ奴がいるかよ？』

笑いながら龍泰が言つと

『龍泰捕まえられる奴なんか誰も居ないじゃん、無理ばっか言つて、  
項が困つてるぢやない』

この声の主は

姓を竜吉リュウキツ、あだ名を妃暢キチヨウ  
と言つ女姓だつた

同じく10人の子達の一人で見た目は龍泰と同一年くらいの小柄で  
赤色のシヨートヘアで美しいと言つより可愛い可憐な顔の持ち主  
でこの物語のヒロインに当たる

女姓なので武力的には龍泰に劣るがそこらの男よりは断然強く何よ  
り頭が切れる

『わあっ たよ』

龍泰は渋々という感じで走るのを辞めた

頂翁兼は竜吉に軽く頭を下げ

『龍泰様、鬼族との戦争も間近と言われております故、勝手な行動は謹んで下され』

疲れきった声で言う頂翁兼

それもそのはず龍泰を追って約2時間全力疾走していたからだ

当の龍泰は全力疾走ではないため息すら切らしていない

面倒そうに

『わかってるって』

と言うだけだ

何故龍人族の里アカナしか封印していないハズなのに鬼族がいるのか

それは龍王が名も無き10人の子達をアカナに追放し再度封印した時

自分の封印術を完璧に押さえ込む事が出来ずに鬼族の里コウセイまで巻き込み封印してしまったのである

元々野望の塊のような野蛮な鬼族は封印された中の世界だけでもと即宣戦布告

これに対し龍人族も反撃を開始

大戦は勃発していないものの一触即発状態であった

### 第3話 鬼族と戦い

『ん？』

頂はあることに気づいた

『そう言えば何故竜吉様はここに？』

『えっ…私は…その…ね』

龍泰と竜吉の目が合った

と同時に

ダッシュ

『あつ』

急いで追い掛ける頃

と2人は止まっていた

その理由は直ぐにわかった

『困まれてんな』

『そつね』

『10いや20はいるな』

龍泰と竜吉はまるで人事のように言う

『龍泰様竜吉様私が道を開きます。お逃げ下され。』

しかし実際は既に時遅し

回りから20体程度鬼が出てくる

『面白くねえ冗談言つなよ、項』

『そうよせつかく楽しめそうなんだから』

と次の瞬間には敵に飛びかかっていく2人

『あっ』

項も遅れて護衛に向かう

鬼の武器は

並外れた腕力

並外れた顎の力

鋭い牙

手に持っている重く丈夫な鈍器である

龍泰の武器は

身の丈程もある背中に付けた大剣

そして腰の左右に下げてる双剣

腰の後ろに付けてある忍び刀

である

竜吉の武器は

体の至る所に隠し持っている投げナイフ約10本

背中にクロスさせて付けている双小剣

腰の左側に下げている長めの剣

である

項の武器は

腰の左側に下げている長めの剣

右側に下げているレイピア

である

龍泰の大剣と鬼の鈍器がぶつかり鈍い音が響く

鬼がそのまま振り抜き龍泰を飛ばそうとする

が龍泰はそれより早く顔面に蹴りをくれてやると同時に龍泰が左手を大剣から離し腰の右側に下げている剣を鬼に突き立てる

『ぐお』

悲痛な叫び声と共に絶命する鬼

竜吉は真っ向から切り合わずに軽い身のこなしで翻弄しながら投げナイフで1人、2人と倒して行く

項も鬼と真っ向から切り合いながらもなんとか倒して行く

龍泰は大剣を天に向け一気に振り下ろす

と同時に身を裂く烈風が目の前一带を切り刻む

龍泰のお得『烈風真空斬』だ

目の前一带にいた鬼達は叫ぶ事すら許されず微塵に碎けさる

竜吉も負けじとお得の技を出す双小剣による高速歩行術『飛影脚』の応用技で名を『飛影斬』と言う

木や時には敵を蹴り地面と平行に超高速移動しながら敵を切り捨てる技である

『ぐは』

『う  
』  
『つ  
』  
『ぐっ  
』  
『うわ  
』  
『うは  
』  
『うご  
』

次々と悲痛な叫び声を上げ絶命する中

『カキンッ  
』

1体の鬼が飛影斬を見切り止めてきた

『つち  
』

竜吉は軽い身のこなしで後退すると双剣を素早く収め長めの剣の柄に手を置き居合いの構えを取る

飛影斬を止めた鬼はニッと笑いこちらに走って向かってくる

『今だ！  
』

しかしその刃は受け止められ竜吉はマトモに鬼のタックルを受ける

『  
うっ  
』

その小柄な体は宙を舞いながら10m近く吹き飛んだ

地面に体を打ち付けながら更に5m程進みやっど停止

『  
うっ  
』

激痛で体が動かない

肋が数本と着地時にぶつけた右手が折れてしまっているようだ

その可憐な顔も苦痛に歪み泥がついている

鬼はニヤッと笑い走って向かってくる

『竜吉様！』

項が剣を振りかざしながら走ってくる

項は竜吉を傷付けた鬼に切りかかった

項の刃は受け止められたが直ぐに距離を置き

『貴様は！』

べつちやら項はこの鬼を知っているらしい

そこに龍泰が来た龍泰は竜吉の前に立ち護れる状態になってから

『後残ってんのはソイツだけか』

周りを見ると確かに残っているのはその鬼だけだった

『くっまた今度遊んでやる』

鬼は逃げ出したがこちらにも竜吉が傷ついているため深追いは出来ない

2人は武器を収め龍泰は竜吉を抱きかかえてその場を去った

## 第4話 拾鬼衆

帰りの道中で龍泰はあの鬼の事を頂に聞いた

『アイツいったい誰なんだ？』

『あの鬼は拾鬼衆の1体ですよ』

『拾鬼衆？』

『はい、鬼族は頭領の下に副頭領が10体居ます。その10体の総称が拾鬼衆なんです。』

竜吉は気絶したフリをしていたが唇を噛みながら話を聴いていた

【私、足手まといにしかならなかったな…】

龍泰はそれに気付いたが何も言わなかった

【竜吉…心配すんな。今度からは俺が命懸けて護ってやるから…】

辺りは漆黒の闇に包まれ始めていた…

『やっと見えましたね』

辺りが漆黒の闇に包まれた頃やっと里に着いた

『俺は竜吉をガナツ臥夏とガイエン概淵ん所連れてくから』

臥夏と概淵も10人の子達の2人である

臥夏はあだ名を源翠ゲンスイ概淵はあだ名を候漢コウカンと言っ

2人とも幼き頃から医師になりたいと勉学に励みんだ

今ではアカナ1の医師と言われている

2人とも外見には恵まれなかったが力は強い見た目はどちらも40歳前後に見える

『わかりました。今日の件は私から龍人王様に伝えておきましょう。では』

軽く一礼し項は龍人王の屋敷に向かった

『わがたまり全部受けてやっから…好きなだけ泣けよ』

優しく、はっきり聞き取れる声で龍泰は言った

『ヒクッ』

『いつも…そんな優しく言わないくせに…そんな優しい顔しないくせに』

『うわぁん怖かったよ声が出なかった…体が動かないくらい痛かった…死ぬって想った…』

いつもは強く出る竜吉の心の内を龍泰は優しく包み込むように聴き竜吉の涙を…恐怖と悔しさに満ちた想いを全て受け止めた

『えらく静かになったと思ったら寝てやがんよ』

龍泰は優しく微笑みながら言つと臥夏と概淵の所に向かった

第5話 無力だ…

臥夏は外科、概淵は内科を得意としていた

『概淵は静かでイイんだかな』

苦笑しながら龍泰が言う

『おっ龍泰じゃねえか』

低いドスの効いた声が響く

『うるせえよ竜吉が寝てんだ静かにしろ』

臥夏は目を白黒させている

それもそつだ龍泰がそんなことを言うのは初めてだったからだ

『何ビックリしてんだよ。さっさと竜吉を着てやってくれ』

『あっあぁ』

『いったい何があったんだ？ひでえ折れ方だぞ』

龍泰はワケを話した

『ん〜なる程ね。道理で右半身が酷いわけだ』

『なんでだ？』

『右手で居合いをして止められてタックル…右半身に直撃だからな』

『クソ』

龍泰は自分が許せなかった

【俺がもっと早く他の奴らブツ倒せてたら…竜吉は…】

『肋4本折れてて2本ヒビ、右手は複雑骨折だな…完治は秘薬使って1ヶ月つてとこかな』

『そうか…ありがとう。薬くれ、俺が竜吉を連れて帰るから』

龍泰の部屋と竜吉の部屋は龍人王の屋敷にあり隣同士なのである

臥夏から薬を貰いまた竜吉を抱きかかえて屋敷に帰ると気配を感じて海焔カイエンと古羽曾コウソウが出て来た2人と10人の子達のメンツだ

海焔は、あだ名慶應ケイオウと言う、男気溢れる男前で見た目は25歳前後だ

古羽曾は、あだ名を元光と言う、貫禄のある厳つい顔付きで見た目は30歳前後だ

『オイどうしたんだよ?』

海焔が心配そうな顔をして尋ねる古羽曾も心配そうな顔をしている

『俺の部屋で待っていてくれ』

とだけ言い残し竜吉の部屋に入っていた

竜吉をベッドに寝かすと龍泰はベッドの横にあるイスに座った

『すう』

『はあ』

規則正しい寝息をたてて眠る美少女竜吉

龍泰は髪を撫でながら無意識にキスしようとしてることに気付き

『馬鹿か俺は…』

と軽く頭を叩き部屋を後にした

部屋に帰ると2人がイスに腰掛けていたので自分も腰掛け今日の一件を話した

竜吉もこの3人には劣るが決して弱いわけではない

『…なる程…要はお前が雑魚に夢中になりすぎて竜吉を護れなかったって事か!』

海焔がそう言いながら拳を握り締めた

恐らく否定したり、竜吉が悪い、などと言い出したら殴る気なのだろう

『…そういうことだ…俺が…俺がもつと強かったら…』

そう言う龍泰の顔は無理に笑っているが今にも崩れそうな表情だった…

『無理して笑ってるのが見え見えだぞ？』

『護ってやりやあいぢちゃんよ』

『人とはな、誰かを本当に護りたいと想ったとき』

『想いがテメエの限界を越えたとき』

『『本当に強くなれるんだぜ!』』

2人がデカく見える…

【ふっ…泣きそうなんて柄にもねえな…我慢…できっかな…】

『ああ…お前達に話してよかった…』

そう言いながら龍泰は立ち上がり

『剣技特訓してくる』

明らかに涙を隠すためである

海焔と古羽曾は目を合わせ

『『頑張れよ』』

『あゝ、ぢやあな』

暗闇の中…龍泰は稽古場へと足を進めた

## 第6話 厳しい現実

『やあっ』

『はあっ』

『ていつ』

『ん？先客がいるな、鍛錬の相手になってもらっかな』

明るい稽古場に居たのは

『あら龍泰、まだ寝てなかったの？』

そこに居たのは2人の美女この者達もまた10人の子達だ

1人は名を一門寺<sup>イチモンジ</sup>、あだ名を楓<sup>カエデ</sup>という、背が高くスタイル抜群、見た目は20歳半ば辺りか、妖艶、と言っ言葉がピッタリの顔付きだ

もう一人は名を兔希<sup>トキ</sup>、あだ名を綺蓮<sup>キレン</sup>という、背は低くいか、聖母、  
と言う言葉がピッタリの顔付きで優しく癒やしを与える雰囲気を纏  
っている

世の男なら見とれるだろう

が

『なんだ、あんたらか。鍛錬の相手してもらおうかと思ってたけど  
あんたらぢゃ無理だな』

『確かに私たちなら相手にならないわね』

一門寺が恨めしそうにいう

と

『龍泰様に一門寺様に兎希様まだ起きていたんですか？』

項だ

『よお項、イイとこに来たな。鍛錬の相手になってくれよ』

【まっ項でも役不足だが…あの2人よりは幾らかマシだろ】

『私で良ければ』

一門寺と兎希は演舞を止め2人の鍛錬を見ることにした

龍泰の鍛錬は模擬刀を使わない

『はぁぁー！』

先に仕掛けたのは項だ

キンッ

龍泰は忍び刀で攻撃を受け流すと回し蹴りをした

項は左手で受けた

『くっ』

【項の奴…左手を軽く痛めたな、左側を集中的に狙うか】

『いくぜっ？』

龍泰は手数が多い双剣を使い項に隙を作らせる

『ここだ！』

膝蹴りを左脇腹に喰らわす

『ぐっ！』

既に首筋には2本の刃があった

『勝負ありね、そろそろ寝ようか』

一門寺達は自分たちの部屋に帰った

『流石ですね、龍泰様』

『なあ項、拾鬼衆と俺…正直どっちの方が強い？』

『微妙でしょうね…』

【嘘についても龍泰様は直ぐに見破られる…】

『そつか』

俯き何かを考えていた龍泰だが何かを決意した顔をし

『ちやっ俺は寝るわ』

項は頭を下げながら

『おやすみなさいませ』

龍泰は後ろ手を挙げた

## 第7話 決意

次の日

『おい！海焰！起きろよ！』

『んあ？なんだ一体？』

『剣技の特訓手伝ってくれ、古羽曾も誘おうと思ったんだけど居なくてさあ』

『わかったからデケエ声だすなよ』

『ぢゃっ先稽古場に行ってるからな！』

そう言うと龍泰は稽古場へ走っていった

【デケエ声だすなつての全く聞いてねえし…】

『ん〜』

伸びをする海焔

【龍泰がここまで変わるとはな…竜吉のコト大分堪えたみてえだな…じゃあねえ付き合っっちゃっかな】

海焔は自分の武具を取ると足早に稽古場に向かった

海焔の武器は

トンファー2本

湾曲した刀【簡単に言つと海賊が持つてるような刀である】が2本  
先端が になつてゐる異様な槍  
でかなり独特な武器である

『遅いぞ海焰!』

『付き合っつてやんだからガタガタ言っつな』

『はいはい、手加減なしでいくからな!』

『上等!』

『らあっ』

先に仕掛けたのは海焰である

独特な動きに独特な戦い方、そして何より速い

『すっ』

龍泰は防戦一方だった。だが微かな隙を見つけ攻め返す。

キンッガッキャンッ…

鉄と鉄がぶつかり合う特有の音が響き渡る。

その音が響き渡る。トトトト30分。

『はあっ』

龍泰の蹴りが海焔の横腹にクリンヒット。

がその反動を使い海焔の蹴りも龍泰の横腹にクリーンヒット

『『ぐっ  
』』

両者左右に分かれて吹き飛ば

『はあはあ…10分休憩だな』

『ああ  
』

2人とも歩く元気もないのか近くの壁に座り込んだ

## 第8話 鬼族と和平？

ガラッ

『あゝ龍泰と海焔ちゃん』

『ホントだ鍛錬でもしてたの？』

入ってきたのは10人の子達の2人

最初に来たテンションがいつなり高い方は

姓を月<sup>ルナ</sup>あだ名を光<sup>ヒカリ</sup>と言う

見た目は15歳程度で義姉を実の姉のように慕っている

後から入ってきたのが月の義姉

姓の雪奈<sup>セツナ</sup>あだ名を陽妃<sup>ヨウキ</sup>と言う

見た目は20歳前後で綺麗な顔つきだが大きな傷がある

これは猪突猛進し包囲された月を助け出した時に受けた傷でこの傷で2人の絆はより深くなっている

『お前らも鍛錬しに来たのか？』

『そつだよん 暇だったから雪ネエと鍛錬しよ ってさ』

『あつ2対2で鍛錬しねえ？』

『イイわよ？ねっ月』

『モツチロン』

『うしっぢゃ始めるか』

月の武器は飛び道具ばかりで

Y型ブーメランの羽に刃物が付いたような形で鎖が付いているブーメランと

箸の先端が尖ったような鉄製の針

そして弓矢

である

雪奈の武器は

双槍と

死神のような身の丈程の鎌

そして双レイピア

である

広い稽古場に龍泰・海焰チームと雪奈・月チームに左右に分かれた

『いっくよあ〜』

タッ

月が高く飛び上がり針を投げつけてくる

キャンッキャンッ

龍泰と海焔は針を切り落とし同時に突っ込む

と

『せあじ』

雪奈が大鎌を横に振る

『『つち』』

受けたら遠心力で加速した鎌に飛ばされてしまうので後ろに飛び退く

『『じじ』』

月が鎖付きブーメランを海焔に投げる

『くっ』』

槍で受けるがブーメランが巻き付き槍は遠くへ飛ばされてしまった

『『つち』』

雪奈は鎌の勢いを殺さず回りその鎌を龍泰へと投げた

ヒュン

【こりゃマジィな…】

鎌の先端の重さは50キロ程度＋遠心力でとてつもない破壊力である

受ければそのまま飛ばされるが避ける術はない

【となりゃ方法は一つしかねえ】

龍泰は大剣を鎌に当たるように振り下ろす

ギャンッ

と言つ音と同時に烈風が巻き起こる

目には目を齒には齒を攻撃には攻撃をという考えになったようだ

龍泰は軽く飛んだものの見事に着地鎌は稽古場の壁の上の方に刺さっている

【あつぶねえ】

龍泰も内心ハラハラだったようだ

『相変わらずめちやくちやするなあ』

『るせえ他になんか方法あるのかよ?』

『ちゅっ？っ？』

『ぢゃいぢゃんかよ』

てな会話をしていると聞いていた月達が笑い出す

和やかな、そして平凡な日々だ

タタタタタ

ガラッ

『皆さん大変です！鬼族が和平を求めています！』

## 第9話 鬼族の里

ここは龍人王が住まう屋敷の一室

『明らかな罠です！あ奴らが和平などと！』

『私も同感です』

話の内容は鬼族が求めてきた和平のコトである

『しかし戦争は出来るだけ避けるべきものではないか？』

『確かにそうですが一族を滅ぼす訳にはいかないでしょう』

『そうです龍人王様、奴らは騙そうと企んでいるに決まっています』

『ならば「こちらから条件を付けてはどついでしょつか?」』

竜吉の提案だ

『その条件とは?』

- 1 鬼族の頭領の鬼王ザキルはこの龍人族の里に住むこと
- 2 毎日鬼族コウセイの鬼の体数を数えさせるコト

『この条件が呑めないのなら何か企んでるコトになるでしょつか?』

『成る程、よしでは鬼王に使者を』

『私が行きましょ』

『おお学斗か、よし頼むぞ』

学斗は10人の子達の学問の先生である

『ここがコウセイ？』

学斗は今生まれて初めて鬼族の里コウセイに来た

【汚い…臭い…里というよりゴミ置き場だろ】

『ふんいんぞ』

龍人の体長は平均2 m程度、鬼の体長は平均で3 m程度

その声の主の体長は約5 m程度だ

そしてその声の主こそ鬼王ザキルだ

【龍人王様でも体長4 m程度なのになんてデカさだ】

『わっ私は龍人王様の代理で来た学斗だ、和平の話のコトで来た』

『うむ、まあ立ち話もなんだから我が家で話を聞こう』

ドスツドスツドスツ

ザキルの後ろを歩いて行く学斗

『いっただ』

【たっ 縦穴住居！？】

『入りたまえ』

【入りたまえって…仕方ないか】

『どのような内容で？』

『和平には賛同です、が、条件があります』

『ほうどの様な条件で？』

『1 ザキル様には和平の象徴とし龍人王様の屋敷の一室に住んで  
いただく、2 それぞれの里の者を戌の刻に体数を確認するコトを

許す、です』

『…わかった、検討しよう、返答はまた後日』

『では御免』

【怪しいな、やはり何か企んでいたか】

その後も何度か話し合いがあり和平の条約が結ばれたのは100年後であった

内容は竜吉の提案を改良しザキルだけではなく拾鬼衆の内の5人が1月交代で入れ替わるコトが加わっていた

和平にも変化はなく年月が流れていった

第10話 幸せな日々

300年後

『毎日毎日頑張るなあ』

『つたりめえだ、強くなるって300年前に決めたんだ』

話しているのは龍泰と海焰だ

『龍泰、お疲れ様、はい差し入れ』

『ありがとう竜吉』

2人の関係は300年前と変わってないが龍泰の心は大きく変わった

300年前まではあまり喜怒哀楽を示さなかった龍泰が今ではちゃんと喜怒哀楽を示すようになった

『さて、邪魔者は消えるかな？』

ニヤニヤしながら海焔が言う

海焔は知っていた2人は同じ気持ちだけど素直になれずに打ち明け  
れていないコトを

…と言うかみんな知ってるんだけどね

『もう！海焔！一門寺に怒っというて！っというてやるんだから  
』！

『しっし』

【アイツ怒ったらメツチャ怖いんだよなあ】

『ごめんごめんまっ俺は行くわぢゃな』

『おつまたな』

【どうする?…2人だけだぞ?…「いやいや2人だけってのはよくあるだろ」1告白2探りを入れる3飛んでプロポーズ?…4の何もいわないだな…うん」って言って300年…】

【2人だけなんて…龍泰に気持ち伝えたいけど…恥ずかしくて死んじゃうよお…大体龍泰私の事とお想ってたんだろ?私だけ特別視してる感じないし…「いやいや思いつきり竜吉だけ見てるっしょ」ここは少し様子見よう」って言って300年経ってますけど?」】

お気づきだと思いますが2人ともかなり鈍感なんです…

まあ2人とも愛し合っていて幸せなんですけどね

ついでに古羽曾と兎希も婚約してます

雪奈達は異性に興味がないようで…

『あつ稽古場龍人王様の直属護衛部隊が使つらしいから空けなきゃいけないんだってさ』

『じゃ移動するか』

【ヤベエ部屋に呼んだはイイけど…いやしかし…うゝん…勢いで告白する？…でも部屋に行き来するのはよくある話だし…うゝゝ】

【ヤバいやババ龍泰の部屋だ…来た勢いで…って無理だよお…どゝつよ…】

コンコン

『龍泰様は御在宅でしょうか？』

『ん？なんだろ？』

『さあ？』

『入れ』

『失礼します』

『龍人王様がお呼びで御座います。すぐに王室まで来るようにとの  
しつ』

『わかった。下がれ』

『失礼します』

『急になんだ？』

『確かに珍しいわね』

『ぢゃぢょい行ってくるわ』

第11話 嫌な予感…

『おお龍泰、皆席を外してくれ』

『どのような要件で？』

『うむ、実はな…』

『えっ』

内容は驚くべきモノだった…

300年沈黙を保っていた鬼族だが最近怪しい事が起きている

鬼族の寿命は1000年程度とヴィルノアに住む者達の中では短い

が

繁殖力は一番で一年に平均100体程産まれるのだが、ここ近年平均が70を下回っているとの事だ

それらの事から想像出来ることは子供数十体を里に置かず他の場所で育て何かを企んでいるのではないかと言うことだ

『思い過ごしならよいのだが…お主にはその偵察部隊の隊長になり部隊を指揮してもらいたい』

『わかりました』

『うむ、部隊は4人1組の5部隊だ。龍泰はもちろん第1班を主に指揮する。他の部隊の小隊長は第2班は項、第3班が禅福、第4班が呂苑、第5班が、田経だ』

『わかりました、いつ出立ですか？』

『今日で準備を完了させ明日出立してほしい、他の19人には準備が出来次第稽古場に集まって貰っている、くれぐれもザキルに気取られぬようにな』

『はっ』

【偵察任務か…嫌な予感がするな…】

龍泰は300年の間に自分に合った武具を見つけ当てた

新しく左手に指の部分が刃物になっている鉄甲手を装備し武具を軽量化していた

『おし、準備完了。稽古場に向かうか』

『あつ龍泰、任務?…』

【おいおい…そんな顔しないでくれよ…抱き締めたい症候群?にな  
つちまう…】

『ああ、心配すんな、ただの偵察さ』

優しい表情に竜吉はドキッとしたが

『しっ心配なんてしてないもん、ぢゃ頑張って来てね』

『ありがと、ぢゃな』

『バイバイ』

【うゝ初めて任務面倒だと想うよ】

龍泰が稽古場に着くと既に皆集まっていた

『明日出立だ、皆極秘任務だと言うことを肝に銘じておけ』

『はっ』

『ではこれより作戦を言い渡す』

『第1班はコウセイの近距離、第2班は中距離、第3班は遠距離、第4班はアカナの近距離、第5班は中距離を搜索しろ、質問は？』

『…』

『よしでは皆体を休めるように』

』  
ふう  
『

自室のベットに寝転ぶ龍泰

【思い過ぎしであってくれよ】

そう思いながら静かに目を閉じた

第12話 裏切り…

次の日の朝、寅の刻

『皆集まったな、よし出立だ』

コウセイまでは約3時間程度だ

『らしきものはないですね』

『そうだな』

『思い過ごしなのでしょうが？』

『だとイイが』

確かに隠れ里的なモノは一向に見つからないし見つかったと言う伝令も来ていない

『…日が落ちてきたな…集合ポイントに向かうぞ』

龍泰達が着くと既に第2、3、4班は着いていた

『第5班遅いな…』

『集合ポイントに最も遠いですからね』

『先に飯の準備に取り掛かるぞ』

『はっ』

ここはアカナとコウセイの中間よりコウセイよりにある丘である

『遅いな…』

【嫌な胸騒ぎだ…何もなきやイイが…】

不意に龍泰が武器を構える

【何か…来る】

皆も急ぎ武器を構える

『…』

第5班伝令役の栄允だ

普通なら驚かないが普通じゃない

『お前…』

左腕が肩辺りから無いのだ…

『りゅ…た…様、た…変です、あか…が！…かなが！……鬼族に…』

『おい！おい！…クソ』

地面を強く叩いた

『クソすぐにアカナに戻るぞ』

『はい！』

【クソ鬼族め！】

アカナに戻った龍泰達の眼前は地獄だった…

近くにある緊急時の待避場所である揮英山に明かりが灯っている…

『全滅は免れたみたいだな…』

『しかし被害は甚大ですね…』

『ああ…』

『とにかく揮英山に向かいますよ』

『先に行っててくれ』

『？わかりました』

『竜吉…無事…だよな？…』

カチヤ

『ふう…』

竜吉の部屋にも里のどこにも竜吉の骸はない

『よし揮英山に向かうか』

『龍泰、よくぞ無事であった』

『龍人王様！一体何が…』

『うむ…実はな…』

事の内容はこうだ

実は龍王は既に封印を解き放っていて鬼族と共にアカナに攻めてきたのだ

鬼族約5000体が300年の月日を費やし里より1000キロ程離れた場所から穴をほりアカナに奇襲をかけた

実は鬼には鬼にしか聴こえない特殊な声を出すことが出来、それにより正確な位置が掴めたのだ

『クソ！クソ！クソ！血祭りにあげてやる！』

『落ち着きなさい龍泰、このまま突っ込んでも死ぬだけだ』

龍人族は風前の灯火だった。龍人族総数約150名、鬼族総数約600名、龍族総数約1500名と差は歴然だ

### 第13話 生き様…

なのに何故すぐに攻めてこないのか？、それにはわけがある

ヴィルノアに住む者達はある一族以外はどの一族も月に弱いのだ

ある一族とは龍人族だ、龍人族は逆に月により力が強くなる

が

数に差がありすぎる為攻められない

硬直状態だが朝になれば間違いなく全滅だ

周りは囲まれているため逃げられない

『皆に伝えなければならぬ事がある…龍人王としての最後の言葉だ  
…後任は龍泰に任せる』

皆わかっている龍人王の考えを…

『鬼神丸…ですか？』

『…うむ…我のため、いや、我らのために共に死んでくれるものは  
いないか？』

鬼神丸とはここ100年前に完成した丸薬だ

時間にして約10時間鬼族の力が手に入る丸薬だ

それにより龍、鬼、人の血が混じり合った龍鬼人族になれるが薬の  
効果が切れると同時に死に至る恐怖の丸薬だ

『龍人王様、ここには命を惜しむ奴はいない、そりゃ死ぬのは怖い、  
だけどもんなのためなら恐くはない』

皆頷く

『感謝する…』

約150名の中から100名選ばれた

龍泰達が入っていないく100名出た後に拠点を守る事になっていた

そして日の光が登り始めた…

『しっし』

鬼族達が山を登って来る何体かは龍に乗っている

『来たな…龍泰後は任せた…しっかり我の後を継ぐんだぞ…』

『…はい…』

『皆！命を惜しむな！名を惜しめ！我らが一族の為に！』

『おお～』

ガリッ

『うっつがぁ』

体の色が朱色に染まっていく…死が近づくにつれて朱色はより濃くなる…

『うあああ』

選ばれた100名の龍人族が力を完全解放する…

ダッ

皆一斉に地を蹴り駆け出す

決戦の火蓋が切って落とされた…

圧倒的な力に次々に倒れていく龍族に鬼族

『クソ！奴らめなんて強さだ！』

『ザキル様！第1軍隊壊滅です！』

『第2軍隊もほぼ壊滅！』

『相手はたかだか十数名程度！包囲し倒すのだ！』

決戦が始まり5時間程度が経った

龍人族100名中残り約80名

鬼族約600名中残り約250名

龍族約1500名中残り約800名

【後残り5時間程度…か…】

龍泰は拠点である揮英山の頂上から戦いを見ていた

何体か上り詰めてきたが被害は皆無

【残り1000名程度…倒せるのか？】

丸薬の効果切れまで残り1時間…

龍人族100名中残り約50名

鬼族600名中残り100名

龍族 1500名中残り200名

【くっ…痛みが出だした…マズいな…】

『うっ』

ドサッ

【ここまで…か…】

丸薬の効果切れ

龍人族 100名中残り0名

鬼族600名中残り約50名

龍族1500名中残り100名

『なんだ？いきなり倒れだしたぞ？』

『ザキル様！敵は全滅に御座います！』

『そうか、明日まで休息とする』

『はっ』

『龍泰様！大変です！龍族の援軍に御座います！数約800！総大将は龍王です！』

啞然とする龍泰…

【ここまで…なのか？…】

【鬼神丸も…もう…ない…先は死？…】

『わかった…明日が最後の戦だ…皆に休むように伝えてくれ』

第14話 俺は…

翌日早朝…

『行くぞ！皆の者！龍人族の武名を天下に知らしめよ！』

『うおおお』

『敵はたかだか数十名！蹴散らしてやるっぞ！』

『ザキル様の意のままに！』

圧倒的な戦が始まった…

戦が始まり1時間…

拠点を占拠され逃げ延びれた龍人族は十数名…

龍泰は死ぬ気だった…

【一族と共に散ろう…】

そう思っていた…

が古羽曾はそれを決して許さなかった

龍泰が

『俺は…部下が死に自分だけのうのと生きていたくはない！お前達が思ってるほど俺は立派な人間でも強い人間でもない！部下を…友達を失い堪えられる程…強くはない！』

泣いて訴える龍泰…

すると古羽曾は

『貴方が涙を流すところは初めて見ましたな…』

『そんなコト言ってる場合かよ…死ぬんだぞ？…わかってるのかよ…怖く』

ここで言葉は古羽曾に遮られた

『死ぬのは…怖い…とても怖い…けれど…貴方を死なせる訳にはいかない』

『だとしても!』

『もし…死なせてしまったら先代の龍人王に合わせる顔がない…貴方が龍人王として逃げるわけにはいかないと言うのであれば1人の…兄弟として…友達として…生きる!決して死ぬな!龍泰が死ぬば一族が負けたことになる…最後に…幸せになれ…死んでいった者の分まで…』

『…だから…俺は!』

『自分だけでは肩の荷が思いなら分け合えばいい…竜吉がいるだろ?想いを寄せてる人に…と言うならそれは間違いだ…龍泰が思っている程竜吉もヤワぢゃない…わかったな?』

『…』

【涙で…前が見えない…見えるのは古羽曾の大きな手が頭を撫で後

ろを向いた大きな背中…】

『行ってくれ…』

『行って頂戴』

『バイバイ 竜吉とお幸せに』

『サヨナラ…貴方と同じ旗の下で戦えたことを誇りに思います』  
『生きて帰ってこい…命令だ…』

『ふっ…無理難題…ですな…』

『命令無視は許さねえからな！…ぢゃあな！…』

【涙を…堪えろ…顔を…焼き付けろ…あいつらの分まで…喜怒哀楽

を感じるんだ…】

伝令が彼らの壮絶な死を告げたのはそれから約5時間後だった…

第15話 失う辛さ…

【俺は…無力だ…300年前からなんにも変わっちゃいない…】

『たっ大変です！龍泰様！追っ手です！』

『もう…逃げても仕方ない…皆で』

ガスッ

『竜吉…このバカ連れて頂と逃げる…俺達が時間稼ぎするから…』

『でも！海焔は…』

『…気持ち…』

『えっ？』

『気持ちちゃんと伝えるよ…ぢやなきや…身代わりになる意味がねえ…だろ？』

そこにはいつものように意地悪な顔をした海焔が居た…

『早く行け…項任せたぜ？』

『はい！…』

3人の姿が小さくなりやがて追っ手が追い付いてきた…

『我は海焔！今よりここを修羅とせん！行くぞ！…！』

『ひっひいいい』

海焔に近づくモノ全てが果てた

『敵ながら見事なり』

『なっ！龍王！貴様…！貴様だけは…！！』

『来る…か…』

『はぁあっ猛れ！我が闘志！』

ヒュッ

海焔の槍が振り下ろされる

『無力故に無価値…』

『…がつ…』

ポタ…ポタ…

海焔の腹には巨大な爪が突き立てたれている…

『はは…つえな…やっぱ…ガハッ…ああ…終わりか…』

【悔いは…ねえ……だけど…もうちっと…生きたかった…かな…  
…なあ…龍泰…幸せにな…くっ…】

【じっは…?】

『…泰!り…泰!龍泰!』

『ん?竜吉?』

『よかつたあ』

【あれ?なんで俺…】

『海焔!?』

『…海焔は…居ない…』

『クソッ…んだよ…なんなんだよ……』

『龍泰……』

『項は!?!』

『……』

『!…俺が…俺が気絶してる間に何があったんだ?……』

『…前から…鬼族が現れたの…項は……』

『……』

【失うって…こんなにも辛いんだ…胸が…痛い…】

『居たぞ！』

『！』

『竜吉！逃げるぞ！』

【せめて…竜吉だけは…】

『ハアハア…やっと着いたな…』

『…うん…』

そこは100人の子達がアカナに着いて10年くらいしてから約5年の歳月をかけ作った秘密基地だった…

『とにかく休もう…』

『うん…』

真つ暗な中2人はみんなで作った秘密基地に入っっていった…

2人は疲れ果てた体を横たえていた

第16話 幸せな一時

闇の中で規則正しい寝息が聞こえる…

落ち着く…

『りゅ…たい…?』

『ん?』

『りゅ…たい…?』

『寝言…?』

『…ムニヤムニヤ…』

『…つたく…呑気な奴め…』

自然と笑みがこぼれた

些細なコトかもしれない

が

龍泰にとってはかけがえのないコトだ

『…大好き…龍泰…』

『えっ…???.?』

『スウ…スウ…スウ』

『ねっ…寝言?…か…』

目が慣れてきて竜吉の顔が見えてきた

【やべえ…可愛い…】

頭を横に振る龍泰…

【ダメだダメだ!】

龍泰は1人外に出た…

外は星が輝く綺麗な夜空だ

【そっいや長い間空なんて見てなかったな…】

そう思いながら近くの坂に寝転ぶ

龍泰は龍人王に昔聴いたことを思い出していた

いつも在るもの…

今までなかったモノでも…

ずっと在ったならそれが当たり前になってしまふ…だから…

いつも感謝の気持ちを忘れてはならん

【ごめんなさい…今の今まで忘れてた…大切なコト…】

ガヤガヤ

【敵か！】

龍泰は全神経を集中させる

【数は…12体…他には…いないな…よし…】

【居た！】

龍泰の言うとおり12体だ

【声を出されると面倒だな…かといって大技は目立つ…なら…】

龍泰は忍び刀を構えた

タッ

真ん中に居る隊長であろうモノの首を掻ッ切る  
と

同時に鉄甲手を振ると仕込んであった刃が大量に付いたムチのよう  
なモノが飛び出て周りに居た者の首を削り取る

ほんの一瞬の出来事だ

ほんの一瞬で散った12体の鬼を適当に隠し龍泰は秘密基地に戻っ  
た…

## 第17話 絶望の限界

『!?!?!?』

啞然とする龍泰…

ほんの5分程しか空けていない…

それなのに…

基地は無残に壊れ果てていた…

いや

それだけならよかった…

それだけであってほしかった…

壊れ果てた基地の前に倒れている愛しい竜吉…

いや…1語抜けている…

正しくは

血だらけの…愛しい竜吉

座り込む龍泰…

『くそ！…なんで…？何故こんなことに…！？絶対に許さねえ…！  
必ず…』

体に力が入らず這って竜吉に近寄る…

まだ…暖かい…

でも…

腹が…

腹には…

大きな穴がある…

血が…

有り得ない程出ている

目に…

涙の痕がある…

『りゅ…きっ…りゅっ…っ…』

【体が…痛い…？

いや胸が痛いのか…？

いや心が痛いんだな…

ならこの想いは…なんだ…？

苦しい

切ない

寂しい  
辛い  
虚しい  
悲しい  
これが哀しみ？  
とても…ツライ気持ちだ…

ならこの想いは？  
殺したい  
潰したい  
壊したい  
消したい  
死ねばいい  
覚悟しろよ  
これが怒り？

ああダメだ…  
頭が痛い…  
体がヒリヒリする…  
何も考えられなくなる…  
目の奥が熱い…

まだ…

気持ちを伝えてすらない……

もう……嫌だ……

もう……何も……失いたくない……

もう……

誰も……

……想いたくない……】

この時…

龍泰の何が果ててしまった…

『泣いているのか？愚か者め』

龍泰は立ち上がり声のする方を向いた…

【ジュツキシユウカ…クダラナイ】

『お前も後を追って死…』

頭が無い…

頭は？

龍泰が右手に持っている…

『！！！』

ガクガク震えだす鬼達

見てしまった…

龍泰の何も感じていない…

いかなる感情も持ち合わせていない…

冷めきつた…

冷たい眼を…

龍泰は持っていた頭を放り投げ大剣を振り下ろした

目の前の鬼達が一瞬で消え去る

と

『ほお…流石は我が息子…だが…竜吉は弱かったのぉ、クックック  
ッ』

ザクッ

『関係ない…だろ？』

『あっガッ』

龍王の胴体が真っ二つになっている…

『ふう…』

【シヨウモナイ】

『待てい！』

『ザキルカ…』

『貴様！我がコマをよくも！死ねい！』

【チヨトツモウシン…アワレ…】

ヒュン

宙にザキルの首が舞う…

龍泰は小一時間程そこにいたが再び歩き始める…

どこへ？

それは彼にもわからない…

ただ1つわかるのは邪魔をするものが死ぬと言っコトだけ…

その後彼の消息は掴めなかった…

龍泰の消息がわかったのは5000年後

ヴィルノアに住んでいた妖族、魔族、鬼族、龍族、霸族、陰族の姿  
はない…

今より全て無に帰していた

誰の手で？

感情すらない剣士のとによって…

それから1万年後…

ヴィルノアの封印は解けついに人界、ガルシアと繋がった

彼は？…

それは…誰にもわからない…

第18話 俺は?... (前書き)

第2部です

新しく作るほどの量でもなかったなので連載と言っ形にさせて頂きました

第18話 俺は？…

『ここは？…どこだ？…』

俺は今…真っ暗な闇の中に1人立っている…

『俺は…誰だ？…』

『龍泰 りゆうたい だよ…』

どこからか声が聞こえる…

『龍泰？…それが…俺？…なら…あんたは…誰だ？…なんで俺の名前を知ってるんだ？…』

【なんだ…この気持ち永く忘れていた気がする…】

周りが光り始めた…

『時間…みたい…だね…また…逢いに来てね…』

『まっ』

【…夢？…ここは？…どこだ？…】

【真っ白だな…】

そう龍泰が居た部屋は家具から壁から全て真っ白だった

『…！誰か…来る…』

ガチャ

『えっ、ぎゃああー！』

『はっ！』

龍泰は無意識のうちに刀を構えていた

『す、すまない…っい…っい…』

『い、いえ…っ』

龍泰は不思議に思ったことが2つあった

1つは入ってきたのは女だ…何故か顔をマスクで隠している

2つ叫び声をあげたはずなのに誰も来ない

【まあ聴けばイイか】

『俺は龍泰だ、君は？』

『麗 レイ です』

『ここはどこなんだ？』

『町外れのスラム街です…』

『俺は…何故ここに？…』

『地元の者からは白幻の森と呼ばれている森で倒れていました…』

『白幻の…森？』

『はい…言い伝えでは澄んだ心の持ち主の心が荒んだ時その森に行く  
くと記憶を持っていかれるとか…』

『その森に連れて行ってくれないか？』

『…はい…』

## 第19話 白幻の森

白幻の森に着いた龍泰はその森の凄さに驚いた

【見渡す限り木?...これは木なのか?...】

一面真っ白である木も土も霧も出ていて幻想的な森である

『...何か思い出しましたか?』

『いや、初めて来た感覚だ...』

『そうですね...』

小一時間程そこに居たが2人はスラム街へ帰ることにした...

2人の目の前は地獄だった…

『そ…んな…』

『…うぁっ…がっ…頭…が…』

【なんだ…この記憶は…】

『…前で…誰かが…倒れてる?…』

『龍泰…私は…幸せだったよ…ただ…最後に…あなたに…逢いたか  
つた…』

『君は…誰なんだ?…』

『逢えるよ…きっと…神様は…叶えてくれたから…』

『えっ？』

『夫ですか！？大丈夫ですか！？』

『ああ』

『よかった…』

【彼女は…一体…】

『どうしたんですか？』

『いや、はっ』

麗の腕を引き建物の中に隠れる龍泰

彼らの方に2人の国兵が歩いてきた…

『まさかスラムまで破壊するとはな…』

『まあこのスラムはよく問題を起こしていたからな…いずれこうな  
ったさ…』

『しかし相手は1人なんだろう？』

『お前知らないのか？』

『何を？』

『ソイツは1人で南の大国カージユの首都を破壊したって話だ』

『あれは嘘だって聞いたぞ？』

『いやカージユに住んでる旧友が教えくれたが首都ターミアンは死体の山らしい』

『ソイツがやったとは限らないだろ？』

『それが俺の旧友はターミアンに行く用事があつて城門から見たんだつてよ』

『何を？』

『人をなんの躊躇いもなく斬り殺す1人の男を…死者は約5000人らしいぜ…その上男は無傷ときた』

『どうやって捕まえた？』

『さあな…見つからなくてホッとしてるぜ…』

『顔は？』

『わからないらしい…それらしき人物は片っ端から殺す気だろつな…』

第20話 南の大国

『はっ…』

『ひ、ひいひい』

ザクッ

『や、止め』

グシヤッ

『何故民まで巻き込む!?!?』

『キサマニナニガワカル？』

シュパッ

『な、何故だ！？何故我が国を！？』

ズブッ

『キサマニコタエルスジアイハナイ』

『はっ…』

【俺…なのか?…】

『どつしたんですか?』

『いや…なんでもない…』

【とにかく…今はこの後どつするか…】

『あの、城内に逃げませんか?城内は治安がイイからこんな事は出来ないし…1ヶ月くらいなら住んでられるお金の持ち合わせもありますし』

『何故君はそんなに俺に優しいんだ?』

確かにそうである、2人で1ヶ月なら1人、それも女なら3ヶ月くらいは持つハズなのに何故龍泰を誘うのか…

『貴方は、兄に似ているんです…人の面影を赤の他人に見いだすのは失礼だとはわかってはいるんですが…』

『そうなのか…その兄は？』

『死にました…さっき言っていたあの南のカージユの件で…』

【そんな……俺は……】

『とにかく行きましょ』

『…ああ…』

【麗の兄は恐らく俺が殺した…時が経てば経つほど鮮明にその時の記憶が蘇る…どうすればいいんだ…麗になんて言えばいいんだ…】

城内は城を中心に4つのエリアに分かれていて城に近ければ近い程  
治安がイイ

龍泰達は治安の最もイイエリア1の1番安い家を借りた

『とにかく遅いから今日は寝ましよう』

『そつだな』

【とにかく今出来ることをしよう…麗を苦労させないようにしない  
とな…】

龍泰は自室に入りベットに横たわりふと思った

【そついえば麗はいつも顔を隠してるな…なんでだ?…まあイイか  
…とにかく寝よう…】

## 第21話 ネックレス

「ん？」

龍泰は自分の腰に付けてある小さなポーチの中に入っていた物に気付いた…

「これは？…」

それはネックレスだったしかし龍泰も同じ物を付けている

「一体…」

「はっ」

『ほい、竜吉 りゅうきつ』

『龍泰これは？』

『俺の手作りペアネックレスだ、いつも差し入れしてもらってるからたまにはな』

『ホントに！？やったあ ありがとう龍泰』

『ハア…ハア…』

【今のは……竜吉？…それが彼女の名前？…】

小一時間程考えたが答えが出るわけでもなく、龍泰は眠った

次の日

『あれ…面外したんだ？』

『はい、もう必要なくなっただんで…』

『そっか』

【なんで？って聴いちゃいけない雰囲気だよな？うん】

『ぢゃあ私は先に出ますね』

そう2人とも今日は職探しなのだ

『わかった』

龍泰も用意を整えて職探しに出た

【何しようかなあ…】

『ん？モメ合いか？』

『報酬はキツチり払ったでしょ？』

『山賊に襲われて仲間が死んだから金を払えって言ってるだろおが』

『仲間が死んだ場合1人につき1000Gって約束でしっかり払っ

「たぢゃない！」

「気が変わったんだよ、あと1000G払ってもらおうか、ぢゃなきゃ体で払わせるぞ？ひっひっひっ」

【「まったく…面倒な奴らだ…」】

「そんな…」

「ああ！…どつすつわぁ」

龍泰は脅迫していた男を軽々持ち上げて

「男が3人掛かりで女1人脅迫か…情けない奴らめ…」

「テメエ何もんだコラア」

『龍泰だ!』

『ナメてんのかコリア』

ゴスッ

『ぐあっ手があ…こ、コイツなんか着込んでやがったな!』

『何もんだって聞いたから答えてやってんのにいきなり殴ってその上自爆か?』

『デメエいい加減にしやがれ!』

『ナイフとは物騒だねえ』

『死ねえ!』

パキンッ

『えっ? ? ? ? ?』

龍泰は微動だにせず受けた、実は人界の刃物では龍人族である龍泰の体に傷一つつけることは出来ないのだ

そんなこと知る由もない2人は逃げ出した

『ひっひいひい』

『忘れもんだ!』

掴んでいた男を逃げる2人にお返しする龍泰

## 第22話 職探し

『あ、ありがとうございます』

『ん？ああいいよ』

『あ、貴方は？』

『…龍泰…』

『いや…あの…体の方は？…』

『健康だけど？…』

『いや…怪我は？…』

『 ないない 』

【 そか普通は怪我するのか 】

『 あの、傭兵か何かですか？ 』

『 今職探し中 』

『 ちょうどよかった！私は蓮華 れんか です、立花 たちばな  
家に仕えている者で旦那様が娘の蘭 らん 様の護衛を探してま  
し  
て  
ど  
う  
ぞ  
う  
で  
す  
か  
？  
…  
』

『 それは助かります 』

『 じゃあ屋敷の方に移動しましょう 』

『おお蓮華戻ったか』

『旦那様！只今帰りました』

『そちらの御仁は？』

『龍泰です、宜しく』

『彼が街であるチンピラ護衛に囲まれているところを助けてくれたんです、職探しをしている最中だと言うので傭兵にどうかと…』

『腕がどの程度かワシの護衛と決闘する必要があるが…よいか？』

『わかりました』

『では中庭に案内を宜しく頼んだぞ』

『はい、行きましよう龍泰様』

『ああ』

『失礼します』

【なんて広い屋敷だ…】

『ここが中庭です』

『広いな…』

『はい、かなり広いです』

『ん？来たな…』

現れたのはこの屋敷の旦那とその護衛だ

『では任せたぞ』

『はっ』

『旦那様の護衛隊長の影闇 えいあんだ』

『龍泰だ』

『刀を抜け…いくぞ！』

ガシッ

『な、馬鹿な!』

龍泰は影闇の刀を掴んだ勿論怪我一つしていないと言っか刀にヒビが入っている

パキンッ

『あ、力入れすぎた…!』

『く、喰らえ!』

影闇は懐からナイフを出して刺そうとするが硬くて刺さらない

龍泰は手加減しながら右ミドルキックを喰らわした

ガスっ

『ぐあっ』

護衛の右側の鎧が粉々に砕けた

【あらら、やりすぎだな…】

『も、もうよしだ！、な、なんて強い御仁だこれなら安心して娘を任せられる』

## 第23話 族の頭楽羅

【まあイイか…合格みたいだし】

『そういえば龍泰殿歳は？』

【…歳…何歳だ？…わからない…見た目18くらいだから…】

『18歳です』

『おお娘は16歳だ、紹介するでしょう、操 みさお』

『はあい、ちょっと待ってねえ〜』

『早くなさい』

『はいはい』

『娘の操だ、これからは龍泰殿が護衛してくれる腕は確かだから安心なさい』

『操です よろしくね!』

『宜しく』

握手をしながら言う

『今日はもう遅いから明日から頼むとして』

『はい、では...』

『ああ 龍泰殿』

『はい?』

『今日は我が家で食事をとらぬかね?』

『有り難いのですが連れが居ますので…』

『ならばその方もお招きしましょう、食事は多い方が楽しいですし』

屋敷の奥から声が聞こえる

『おお加奈 かな 起きて大丈夫なのか?』

『ええ大丈夫ですわ、妻の加奈です、宜しく御願いますわ』

『あつ宜しくお願いします』

握手しながら言う

【握手って基本なんだな…】

『あつご飯イイんですか？』

『ええ勿論よ』

『じゃあ呼んでくれますね』

『ではまた』

『失礼します』

【夢？に出てくるあの子は誰なんだ？…】

帰路につきながら龍泰は思った

『ん？』

『待ちな！』

『なんだ？』

【昼間のチンピラか】

『へっ昼間はどつも、お頭がやり返してくれらってんでねえ』

『薄汚い手口、やっぱり山賊だったか』

『薄汚いだあ？アハハ正義のヒーロー気取りか？あぁ！？』

『だとしたら貴様らはただの子役だな』

『へっデケエ口叩いてな！すぐに痛い目見んのはテメエの方だからなあ！』

『コイツらの頭やつてる楽羅 らくら だ…薄汚い手つつつたなあ？俺は筋通さなきゃ気がすまねえ質だ、どこが薄汚かったんだ？』

【確かにコイツは目が綺麗だ、あんなクソな奴らと同じ考えとは思えないな…】

龍泰は昼間の一件を話すことにした

『…ってわけだ』

『…話が違つな…』

【やっぱりな…】

あの3人組の姿はない

『すまなかつたな…下の責任は上の責任でもある』

『ああイイさ』

『いやあの3人にはキツク言つとく、また3人連れて謝りに来る、名前聴いとしてイイか?』

『龍泰だ、よろしくな』

『ああ、よろしく』

『ぢゃあな!』

『ああ』

【忘れた記憶取り戻せねえのかな? 気になって仕方ねえ…】

またそんなことを考えながら帰路を急ぐ龍泰

『龍泰さん、お帰りなさい』

『ただいま、今帰ったところか?』

『はい』

『仕事は？』

『見つかりましたよ、龍泰さんは？』

『見つかったよ、晩ご飯誘われたんだ、勿論麗も一緒に』

『ほんとですか！？』

『ああ、あと敬語は使わんでいい』

『あっはい』

『支度してゆくNONO』

『は』

## 24話 立花家

龍泰は軽い自己紹介と紹介を受けていた

【かなりの人数だな】

そう立花家はかなりの富豪なのだ

主 立花 薫 かおる

妻 立花加奈

操の姉 立花昇華 しょうか

【これだけで十分だな】

麗と話をしながらご飯を食べていると薫が話しかけてきた

『龍泰殿』

『薫様、何です？』

『操の護衛内容の説明をしてなかったのにな、内容はいたって簡単だ、操を見張って部屋から出ないようにしてくれ』

『はい、わかりました』

【簡単だな】

そのあとは何人かと雑談しながらご飯を食べ食事会はお開きとなった

『いっぱい食べたね』

『そうだな、美味かったか？』

『勿論、龍泰は？』

『ん？美味かったよ』

丁度立花家の屋敷と龍泰達の家の間くらいまで来た

『龍泰！』

『楽羅か』

『おら！早く謝れ』

『ろろろすいまへんねした どうもすいませんでした』

『かなり痛めつけたな』

『言い訳しやがったからなあ』

『なるほどね…』

『そついや困ってる事ないか?』

『あるのはあるけどな…』

『なんだ?迷惑かけたから手伝ってやるぜ?』

『白幻の森で記憶を失ったみたいなんだ、取り戻し方がわからない、知らないか?』

『…夢見の洞窟…』

『え??.』

麗は驚いた…

【聞いたことがある…夢見の洞窟…】

『でもそれは伝説じゃないの?』

その伝説とは、夢見の洞窟に行くと記憶が蘇ると言うモノだが

『いや、場所もわかってる、ただ…』

『ただなんだ？』

『ここは北の大国ディザイア…夢見の洞窟は西の終わりにある遺跡の中にあるらしい…そこにいくには西の大国キエラとその他小国、計5ヶ国程度通らなくちゃいけない』

『そんな…』

【龍泰には理解出来ないが無理に近いことらしいのはわかる…】

『ぎゃあああああ！』

『なんだ！？…』

その声は龍泰達が進んできた道の方角から聴こえる

『楽羅！麗を頼む！』

『ああ！』

走り続け着いた先は…立花家の屋敷…  
人だかりがあることからやはりここだだとわかる

## 第25話 西の終わり

『一体…』

とにかく龍泰は屋敷の人間に話を聞くことにした

門兵は今日あった食事会に参加していたので龍泰にことの次第を教えてくださいました

『旦那様が何者かに殺された…加奈様や昇華様、操様も危ない状態らしい…』

『そんな…』

『悪いが今日入隊したばかりの君を3人の護衛につけることは出来ない…』

屋敷の中から護衛隊長の影闇の声が聞こえる

『でも俺には金が必要な』

『金は配給する…心配するな…』

『…わかった…』

2人の元へ帰る龍泰

『龍泰！何があったの？』

『実は…』

今日の一件を話した

『そんな…』

『楽羅…』

『…西か？』

『ああ…正確な方角を教えてくださいあと方位磁石もくれ』

『西南西だ、ほらよ』

『ありがとう、後麗を頼む』

『まったく、わあったよ』

『麗、少し空けるぞ』

『わかった…早く帰って来てね？…』

『ああ…楽羅、少し外してくれ』

『變の1』』

ゴシソ

『ウ〜』

龍泰のゲンコツを頭にくらいフラつく

『そんなに強く突っ込まなくても…』

『はいはい、早く行け』

『はーん』

『…どっつしたの？急に…』

『真剣な話だ…麗の兄を殺したのは恐らく…俺だ…』

『えっ…』

『すまない…謝ってすむことじゃないのはわかっている…』

『でも…記憶がないんじゃないの？…』

『ない、それは確かだ…ただ…何度か一部だか思い出した…その中に逃げ惑う人を…殺した記憶があった………………本当にすまない…』

『すぐに許す…、と言えば…嘘になります…白幻の森で記憶を失ったならあなたは優しい人だったはず…だから約束して下さい…記憶が戻ったらあなたに何があったかを…』

『わかった…』

『何故でしょうね…』

『？』

『たった一人の肉親を殺されたのに…あなたを責める気になれない……』

麗は泣き始めた…

『私は…あなたを愛してしまっている…』

『…』

『私は…えっ？』

『もう…何も言わなくていい…ありがとう…』

抱き締める龍泰

【何故…こんなに龍泰に引かれるの？…何故…こんなに焦がれるの？…何故…少ししか一緒に居なかったのに愛してしまっているの？…】

【なんでだ？…麗の泣き顔をみていたら急に抱き締めたくなった…】

『あっ』

我に返った麗は恥ずかしくなった

『龍泰、楽羅さんが戻って来ちゃう…』

【龍泰って言っちゃった…恥ずかしい…】

『そっだな…』

【ああ…離れると恋しくなるよお】

『いっ行くの？』

『今すぐ…』

『えっ…』

『悪いな…気になって仕方ないんだ…』

『わかった…じゃあ…』

『ん？』

目を瞑り龍泰の方を向いている

【マジ？…俺多分初めてなんですけど？…恥ずかしいでしょ？…う  
う…】

チュッ

『…ありがとう…』

【ヤバい…顔真っ赤だろうな…】

『ああ…』

【顔が熱い…】

『じゃあな…楽羅によるしくっていつといつくね』

『わかった』

## 最終話 かけがえのないひと

こうして龍泰は西の終わりを目指した

幾多の難を乗り越えてきた先は西の終わりの遺跡

【遺跡と言うより孤島じゃないか？】

確かに西の終わりは大陸と少し離れた孤島だったただ見たこともない建造物があるため遺跡の部類に入っているのだ

『さて、どことだろっ？』

【…やっと…着いたね…】

『なあ…あんたが竜吉なんだよな？』

【それは思い出して？…】

『どこに行けばいいんだ？』

【このまま真っ直ぐ…里が…ある…】

『わかった』

『ここか…崩壊し』

『あっがっ』

『な…んだ…』

【全てを…思い出した…愉しかった事も悲しかった事も…】

【思い出したくなかった？…】

『いや、思い出してよかったよ』

【ありがとう…】

『ごめんな…バカだったよ…』

【何が？】

『俺は…ただ過去から逃げてただけだった…過去を忘れて強くなる訳がない…過去を受け止めて強くなるもんだ、愉しかった事や嬉しかった事ばかり受け止めて、悲しかった事や辛かった事は切り捨てて、そんな都合イイことやっても強くなれるわくなかったのに…ただ受け止めるのが嫌で逃げて逃げて…バカみてえだな…』

【でも…受け止めてくれた…それで幸せ】

『やらなきゃならないことがやっと見えてきたよ』

【…龍泰…】

『みんなに負けねえくれえデカくなってやるからよ、もうちっと待っててくれ』

龍泰はそれより約3ヶ月で全土を平定した

総死者数 0

全土を平定した龍泰が出した法律は簡単にまとめると  
上下関係のない社会  
犯罪がないよう皆で協力する  
皆で喜怒哀楽を分かち合う  
だ

皆が笑って暮らせる世…

竜吉と2人で作ってみたいと言っていた世界…

『約束通り作ったぜ？』

【今日：龍泰から私宛てに文が届いた…記憶の事を書いてあって最後に 俺は…竜吉を忘れることだけは絶対に出来ない…だから麗とも居られない…麗を傷つけちゃう…ごめんな と書いてあった…文と一緒に花も贈られて来た、花にも小さな手紙があった、手紙にはこう書いていた

花の名前は紫蘭 しらん 花言葉は…お互いに忘れないように…

涙が止まらなかった…

でもこの涙は綺麗なモノだ

この涙は…悲しみではない、  
と言えは嘘になるけど大半は嬉しさだ…

龍泰に逢えてよかった…心からそう想える【

龍泰が全土を平定し既に幾年たっただろうか…

未だに国は栄えている…

皆が笑って暮らしている…

笑顔の素敵な国だ…

龍泰は国を創ると後を任せ街外れに住んでいた

『ほら、竜吉…人は心の壁が無くなるとこんなにも穏やかなんだぜ？自分とは違うモノを受け止める勇気が全てを幸せに変える…そう俺に悟らせたのはお前だしな…』

【照れるぜ】

『あつこのネックレス返さなきゃな』

『お揃いのヤツ龍泰私の首から取って持っていったもんね』

『お前を前にすると優しくなっちゃまってたんでねえ』

【ありがとね】

『ああ、俺ももうそっちに行くぜ？十分に生きたからな……もう流石に寿命みてえだ』

【うん…おいで】

『竜吉』

【何？】

『やっぱりお前だけだよ、俺の路を照らせるのは』

【ありがと、照れるぜ？】

『可愛い奴め』

【あつそう言えば私の墓に毎年同じ花を添えてたけど…あの花は何なの？】

『あれは姫桜、花言葉は永続する愛情だよ』

【ありがとう】

『イイよ…お前は俺にとって かけがえのないひと だからな』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1785c/>

---

かけがえのないひと

2010年11月6日01時39分発行